遠くて近い信仰者（３）ヤコブ　　**創世記 32:13～32**

アブラハムの子がイサク、イサクの子がヤコブで、「すべての人々の祝福の基となる」という約束は、アブラハムからイサクへ、イサクからヤコブへと引き継がれてきました。神はご自分を「アブラハム、イサク、ヤコブの神」と呼んでおられますが、それほどに、アブラハム、イサク、ヤコブは特別な存在です。

ヤコブは「波乱万丈」という言葉がぴったりな人生を送りました。ヤコブの生涯は創世記 25 章から 49 章までに詳しく書かれており、その全部を学ぶことはできませんので、今朝は、叔父ラバンのもとから故郷に帰ろうとしているヤコブの姿を学ぶことにします。この箇所にはヤコブの生涯を変えた大きな出来事が描かれています。ここから、今日の私たちにも当てはまる霊的な教訓を学んでおきたいと思います。

１．人が持つ恐れと不安

ヤコブは、叔父のラバンのもとで二十年を過ごし、この時、生まれ故郷に帰ろうとしていました。ラバンのところへは、彼ひとりで、何も持たないで行きました。しかし故郷に帰る時には妻と十一人の男の子、大勢のしもべ、はしため、それに家畜の群れ等、つまり相当豊かになっていたのです。これなら「故郷に錦を飾る」という言葉のとおり、ヤコブは胸を張って、堂々と故郷に帰ることができたはずでした。

しかし、故郷が近づくにつれて、ヤコブの心にはひとつの恐れが募ってきました。それは、ヤコブの行く手にまちかまえている兄エサウへの恐れです。二十年前、イサクは、兄エサウに扮装して、目がよく見えなかった父イサクをだまして、祝福を横取りしました。兄エサウは、弟のしたことに怒り狂って、ヤコブを殺してやろうと狙うようになりました。それで家を出ることになりました。ヤコブが叔父ラバンのところに行ったのは、じつは、兄エサウの手から逃れるためだったのです。ヤコブは、兄のもとに使者を送り、エサウの様子をさぐらせましたが、なんとエサウは四百人の部下の兵士をつれてヤコブのところに向かってくるというのです。「たとえ二十年という長い年月が経っていてもエサウの怒りはまだ解けていない。せっかく得た財産も、家族もエサウに奪われ、私の命もまたエサウに奪われてしまう。」と、ヤコブは恐れ、不安になったのです。おそらく、ヤコブは、叔父ラバンのもとで過ごした二十年の間、おりに触れて兄エサウのことを思い出し、自分がしたことに良心の呵責を覚えていたことでしょう。結局ヤコブは二十年間、この問題から逃げていただけで、何の解決もしていなかったのです。ヤコブにとってエサウに出会うことは、ヤコブの過去と出会うことでもあったのです。人の心にある感情は 20 年、30 年ぐらいすぐに戻ると言われます。ヤコブは、ここで再び、兄との和解という問題に直面しなければならなくなりました。私たちも、過去の問題、特に罪の赦し、人との和解という問題をそのままにしておいてはいけないということを教えられます。罪の赦しを体験しないまま問題を先送りしても、いつかどこかで、必ずその問題にぶつかるでしょう。たとえ、この地上で問題を避けることができたとしても、やがて、神の前に立たなければならない時がやってきます。しかし私たちには、イエス・キリストによる罪の赦しと、神との和解、そして、人との和解の道が示されています。もっと大きな問題に直面する前に、今というこの時、罪の赦しと和解とを自分のものにしたく願わされます。

２．恐れと人間の努力の限界

さて、いよいよエサウに出会わなければならないという時、ヤコブはエサウをなだめるため、彼に贈り物をすることを思いつきました。ヤコブが選んだ贈り物は「雌やぎ二百頭、雄やぎ二十頭、雌羊二百頭、雄羊二十頭、乳らくだ三十頭とその子、雌牛四十頭、雄牛十頭、雌ろば二十頭、雄ろば十頭」(14-15 節)、全部で 550 頭以上もの家畜でした。ヤコブはこれを何組にも分けて、列にし、それぞれをしもべたちに託しました。そして、それぞれのしもべに「もし私の兄エサウがあなたに会い、『あなたはだれのものか。

どこへ行くのか。あなたの前のこれらのものはだれのものか。』と言って尋ねたら、『あなたのしもべヤコブのものです。私のご主人エサウに贈る贈り物です。彼もまた、私たちのうしろにおります。』と答えなければならない。」（17-19 節）と言い含めました。エサウが、延々と続く贈り物の列を見て、心をやわらげてくれるだろうと期待したのです。

これは、なかなかヤコブらしいやり方でした。ヤコブは、良くも悪くもとても知恵があって、兄エサウも、父イサクも、そして叔父のラバンも、彼にはかないませんでした。ヤコブは、これまでも、その知恵や才能によって危機を乗り越え、人生を切り開いてきました。今回もエサウに会うために自分ができるすべてのことをしたのです。しかし、ヤコブに平安はやってきませんでした。できるかぎりのことをしたヤコブに与えられたのは「もしや、彼は私を快く受け入れてくれるかもしれない」というかすかな「期待」にすぎませんでした。どんなに努力し、すべてを整えても、それだけでは、平安を得ることができないのです。たしかに、なすべきことをなし終えた時、私たちはある種の「安心」を感じます。しかし、それは表面的、一時的なものにすぎません。新約聖書ピリピ人への手紙に「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」ピリピ 4:6-7 とありますが、私たちに必要な平安は、目に見える条件や状況にかかわらず与えられる平安です。人間の努力による「安心」ではなく、「人のすべての考えにまさる神の平安」が必要なのです。その神の平安を得るために何を私たちはする必要があるのでしょうか？

３．神の恵みと平安が恐れを取り除く

本当の平安を得るためにしなければならないこと、それは、第一に、ヤコブのように神と出会うことです。ヤコブはエサウに出会うことを恐れました。そして、エサウに出会っても大丈夫なように、知恵を尽くして、準備をしました。しかし、ヤコブは神に出会うことを忘れていました。エサウと顔を合わせなければならないという恐れだけに心を奪われていたのです。ヤコブは、エサウの顔を見る前に、まず、神の顔を見なければならなかったのです。このことは、今日の私たちにもあてはまります。私たちは、毎日、毎日、さまざまな困難に直面しています。そうした困難を乗り越えていく秘訣は、神と向かい合うことにあります。どんな場合でも、まず、神のもとに行き、神と一対一で向かいあい、神からの恵みを確信できるよう、祈り求めることです。そうでないと、すぐパニックに陥ったり、簡単に恐れにとらわれたり、あきらめが先に立つ、希望のない日々を過ごすようになってしまいます。

第二は神と格闘することです。ここにはヤコブが神と格闘したことが書かれています。ヤコブは、家族にヤボク川を渡らせてからも、ひとりそこに残りました。先に進んでいく確信がなかったのです。まだつかむべきものをつかんでいなかったのです。そのとき、ひとりの人がやって来て、ヤコブと格闘しました。この人とは、あとで分かることですが、神ご自身でした。旧約には、神が人の姿でご自分を現わしておられるところがいくつもありますが、ここもそのひとつです。神との出会いを忘れていた彼が、神と出会ったばかりか、取っ組み合いの格闘をするようになったのです。ヤコブは実際の格闘をしましたが、私たちにも、霊的、信仰的な意味での神との格闘が必要です。ではそれはどうすることでしょうか？

ある人にとって、その格闘とは、真理を求める格闘かもしれません。聖書が言っていることと、自分が考えていることとが食い違う時、聖書が正しいのか、それとも自分が正しいのかということで悩むことと言えます。真剣に真理を求める人は、熱心に聖書を学び、調べあげることでしょう。聖書が正しいなら、自分が間違っていることになり、聖書に従わなければならなりません。イエスは私たちに「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれま

す。」マタイ 7:7 と教えられました。あの映画の大作「ベン・ハー」は 60 年以上も前に製作されましたが今でもケーブルテレビで時々上映されます。ルー・ウォーレスが書いた小説『ベン・ハー』を映画化したものです。このルー・ウォーレスはもともと無神論者で、聖書を信じられず、キリスト教を否定する目的で聖書を調べていくうちに否定できなくなり、ついに彼はクリスチャンとなり、そして小説「ベン・ハー」を書いたのです。真理はのんびり待っていればいつか分かるようなものではありません。熱心に求め、捜し、たたき続ける、そのような苦闘、格闘が必要です。

真理を求めてさまざまな格闘がありますが、その中で聖書が、私たちに命じている格闘がひとつあります。それは「自分の罪と戦う格闘」です。ヘブル人への手紙に「あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがありません。」ヘブル 12:4 とあります。私たちは、自分が罪人であることを認めたからこそ、私たちを罪から救ってくださるキリストを信じました。クリスチャンは罪赦された人々です。しかし、それで、自分の罪が全部なくなってしまったわけではありません。かつては「悪いことをしなければ罪ではない」「ばれなければ罪ではない」と考えていましたが、罪とは言葉や態度、行いに表れたものだけではなく、もっと深く自分の人格や存在にかかわっているものだということが分かるようになったのではないでしょうか。そして、自分の罪と戦って、打ちのめされるような経験をする、そこから、罪の赦しだけでなく、罪からのきよめを求め、それをキリストの恵みによってつかんでいく、それがクリスチャンの歩む道です。ただそれは自分の罪深さを知って、自分自身を責め続けることではありません。その違いは自分の無力さを知り、それを受け入れられるかどうかということです。

そして第三に、神に降伏し、自分を明け渡すということです。ヤコブは神と向かい会い、神と格闘しました。ヤコブがなかなか降参しませんでしたので、神はヤコブのもものつがいに触れてそれを外し、ヤコブはそれ以上闘うことができなくなりました。「もものつがい」というのは「股関節」のことですが、それは腰の部分です。聖書では腰は力の源という意味で使われています。漢字でも「腰」は「からだのかなめ」と書きますね。ヤコブは自分の知恵に頼ってエサウをなだめようとし、自分の体力にまかせて格闘しました。しかし、神は彼の力のみなもとを打ちました。そこで、ヤコブはついに神に降参し、自分の無力さを知り、自分を神に明け渡すことになったのです。

この時のヤコブにとって、エサウに会わなければならないことが最大の問題でした。なんとかしてこの問題を解決したいと必死になっていました。悩みぬいて小出しにプレゼントをしてエサウの機嫌を取る方法を思いつきましたがそれでも不安は取り除けられませんでした。本当の問題はヤコブ自身にあったのです。周りや他人が変ることにエネルギーを費やしながら、自分自身は変わろうとしない人が時々おられます。確かにそうやっていればいつか他人は変わるかもしれません。しかし自分が変った方が早いし確実だと思うのですがどうでしょうか？　ヤコブは、痛い思いをしましたがここで、そのことを悟り、神に自分を明け渡したのです。

ヤコブが降参して、自分を明け渡した時、神は、ヤコブに「イスラエル」という新しい名をつけました。「名をつける」というのは、その人の上に支配権を持つことを意味します。ヤコブは、この時、神の支配に自分を任せたのです。つまり自分の人生の主人を主なる神様に置いたのです。ヤコブは、神と出会った場所を「ペヌエル」と名づけました。「神の顔」という意味ですが、ヤコブは、この時、神の顔が自分に向けられていることを確信したのです。この後、神はヤコブの恐れを取り除き、エサウとの間に真の和解と平和を与えてくださいました。そんな遠い昔に生きたヤコブの話しなんか今の私の状況では無理と考えられるでしょうか？　今もキリストは「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」マタイ 7:7 と語っておられます。少々、痛い思い、辛い中を経験するかも知れませんが神は私たちを変えてくださり、真の平安を与えて下さいます。